京都市動物園における認知課題がゴリラの福祉に与える影響

渡辺　岳

【背景・目的】 近年、動物に対する倫理の意識が高まる中で、動物園という施設の存在意義が問い直されつつある。新しいあり方を模索しようとする、動物園の具体的な取り組みに注目し、その効果について検討することは、動物園が今後の方針を決めるための助けになると考えられる。京都市動物園では、4 種の霊長類（チンパンジー、ニシゴリラ、シロテテナガザル、マンドリル）が、タッチパネルに表示された認知課題に取り組む様子を、来園者に展示するという試みがなされている。課題に正解することで、リンゴ片などの報酬をもらえるため、この試みには、採食時間の延長と認知的刺激をもたらすというエンリッチメントとしての側面もあると考えられている。そこで、本研究では、学習に参加するニシゴリラの行動観察をすることにより、学習に参加することの、エンリッチメントとしての機能を検討するとともに、動物がこのような実験に参加する様子を、来園者に展示することの意義を考察することを目的とした。

【方法】 京都市動物園のニシゴリラを対象に、2017 年 10 月 15 日から 12 月 17 日にかけて、計 17 日間の行動観察を行った。学習に参加する前の時間帯、学習に参加している時間帯と、同じ時間帯で学習が休みの時の行動をそれぞれ記録した。学習参加前の時間帯では、学習に参加する機会の多い子どものゲンタロウ（5 歳）を対象として個体追跡による観察を行った。学習に参加する時間帯においては、その時展示エリアにいるゲンタロウか、ゲンタロウに比べると学習に参加する機会の少ないオトナオスのモモタロウ（17 歳）を対象として、個体追跡による観察を行った。総観察時間は 19 時間 35 分であった。

【結果】 学習参加前の時間帯において、ゲンタロウは休息や移動に多くの時間を割き、次いで遊びも頻繁に行っていた。学習中の時間帯においては、学習がある日にはゲンタロウもモモタロウも採食または学習に多くの時間を費やし、学習のない日には採食に多くの時間を費やした。ゲンタロウの場合、学習のない日に採食に費やした時間は、学習のある日に採食と学習に費やした時間の合計より短かった。また、学習のない日と、学習はあったが他個体に参加する機会をゆずった日にのみ休息が観察された。モモタロウの場合、学習のない日は殆どの時間を採食に費やし、これは学習のある日に学習と採食に費やした時間よりも長かった。また、学習に参加した時間はゲンタロウよりも短く、学習のある日にのみ休息が観察された。

【考察】 本研究の調査結果から、学習に参加することは、ゲンタロウの場合は採食に関わる行動を増やし、休息を減らすことに繋がる可能性が示唆された。これは、松沢（1999）の提案する採食エンリッチメントの効果を評価するための基準に合致する。また、ゲンタロウは、学習への参加は自由という条件で、学習のある日は全観察時間の 60％以上を学習に費やしていたため、自分の意思で、ゲンタロウにとって魅力的である、学習に参加していたと考えられる。

一方モモタロウは、学習に参加した日は採食に関わる行動が減り、学習のない日には見られない休息が観察された。また、ゲンタロウに比べると学習に割いた時間が少なかったため、モモタロウにとっては学習が、ゲンタロウほど魅力的ではなかったと考えられる。しかし、個々の観察日においては学習に多くの時間を費やしている日もあり、そのため学習はモモタロウにとっても、ある程度は魅力的なものだと推測できる。よって、モモタロウを対象とした学習の方法には、今後もさらなる工夫が必要だと考えられる。ただし、本研究では、観察データが限られていたこと、また、採食エンリッチメントにおいて重要と考えられる、食べものを探して獲得するまでの過程を含めた採食時間について、考慮することができなかったということに留意する必要がある。（比較行動学）